

## 快適住まい環境研究会報告 第3報 : 住宅改造の問題点

著者	関谷 伸一, 杉田 収, 西脇 洋子, 山際 和子, 水戸 美津子, 室岡 耕次
雑誌名	新潟県立看護短期大学紀要
巻	4
ページ	185-189
発行年	1998-12
その他のタイトル	Research Report on the Suitable Housing Environment (No.3) : Several Problems Relating to House Remodeling
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10631/407">http://hdl.handle.net/10631/407</a>

# 快適住まい環境研究会報告 第3報

## —住宅改造の問題点—

関谷伸一, 杉田収, 西脇洋子, 山際和子,  
水戸美津子<sup>1)</sup>, 室岡耕次<sup>2)</sup>

新潟県立看護短期大学, <sup>1)</sup>山梨県立看護大学, <sup>2)</sup>ハート1級建築士事務所

### Research Report on the Suitable Housing Environment (No.3)

#### — Several Problems Relating to House Remodeling —

Shin-ichi SEKIYA, Osamu SUGITA, Youko NISHIWAKI, Kazuko YAMAGIWA,  
Mitsuko MITO<sup>1)</sup>, Koji MUROOKA<sup>2)</sup>

Niigata College of Nursing, <sup>1)</sup>Yamanashi College of Nursing, <sup>2)</sup>Heart Architect's Office

**Summary** This paper is an annual report on our research in 1997 on house remodeling.

1. In this paper, we have discussed housing problems chiefly citing practical cases. Several problems requiring a solution in terms of house remodeling have been clarified as follows: (1) Can older adults and their family efficiently resolve their intention about house remodeling?, (2) From where can the funds for remodeling be provided?, (3) Whom should they consult about house remodeling?, (4) How can they select equipment that meets the older adult's needs.
2. We investigated three model houses. All provide housing in which people can gain the experience of self-care activities first hand.
3. An open session on house remodeling was held. The session indicated that a place in which we can experience living and operating various equipment is needed.
4. The second and the third forums on housing were held inviting an occupational therapist and an architect, respectively. It was emphasized that house planning should be made from the stand-point of the persons living in the house.
5. As a possible solution to the above-mentioned problems, we propose a model house named the TORAI house. TORAI means "try" in English. The experience of trial and error is most effective in remodeling a house.

**要約** 快適住まい研究会の平成9年度の活動を報告した。

1. 定例の検討会には、障害者、保健婦、ホームヘルパー、建築士、作業療法士らが参加した。その議論の中から住宅改造に関して、(1)改造への意思、(2)改造のための資金、(3)相談の窓口、(4)福祉機器との関連、が問題点としてあげられた。
2. バリアフリーモデル住宅を見学し、そのうちの3例について報告した。それらはいずれも体験型モデル住宅を目指していた。
3. 公開研究会を実施し、介護機器を実際に使ってみたり、部屋の間取りを試してみる場がない、ということが指摘された。
4. 専門家を招いて、フォーラムを開催した。「住み手」の立場に立った住まいづくりの必要性が訴えられた。
5. 部屋の間取りや家財道具・福祉機器に可変性を持たせたモデルハウスで生活体験をし、それらを試してみるができる場を「トライハウス」と名づけ、提案した。

**Key words** 高齢者 (elderly), バリアフリー (barrier free), 住宅 (housing),  
住宅改造 (house remodeling), トライハウス (TORAI house)

## はじめに

近年日本は急速に高齢社会に向かっている。新潟県においても65歳以上の人口割合は、1970年代までは10%に満たない状態であったものが、1980年には11.2%、2000年には21.3%に達すると予想されるほど、急速に高齢化が進んでいる<sup>1)</sup>。このような高齢社会に対応するため、政府は「ゴールドプラン」、 「新ゴールドプラン」を提示し、在宅福祉を目指した基盤整備をすすめてきた。1997年には介護保険法が成立し、2000年には施行される予定である。しかし公的介護保険制度ができて、介護の場である「住宅」が、旧態依然たる状態では、本当の意味での在宅福祉は不可能である。このような意味から快適住まい環境研究会では、在宅介護が可能な家づくりについて検討してきた<sup>2), 3)</sup>。そこで平成9年度は、特に住宅改造の事例を検討し、具体的な問題を掘り起こすことと、これらを解決するためのモデルハウスの試案をまとめることを試みた。

本報告では、そのために実施してきた事例検討会と既設のモデルハウスの見学、フォーラムと研究会の開催などの活動結果をまとめ、今後の問題点を指摘したい。

## 1. 事例検討

### 事例1

50代男性のAさんの場合

状況：脊髄の病気で下半身が不自由。一人で起き上がったり、腰を曲げたりが困難。しかし家屋内では杖を使ってどうにか歩行可能。一人暮らし。自宅を改造したい。

改造：和式トイレに手すりを、玄関の上がりかまちにスロープと手すりを、浴室には、すのこを敷き、手すりをそれぞれ設置し、また廊下の床を高くして、部屋と廊下の段差をなくした。

経費：上越市の住宅リフォーム助成を受けたため、自己負担は経費の半額で済んだ。

問題点：上越市には住宅改造の助成制度があるが、全額補助を受けることができるのは、生活保護世帯のみであり、前年度所得もあったAさんの場合半額助成となり、東京都江戸川区のように全額助成を行っているところとは大きな較差があった。また、住宅改造の相談を受けた市では、作業療法士を含む担当職員が自宅を訪問し、場合によっては建築士会を通して大工さんを紹介し、具体的な改造計画を検

討してくれる。しかし、高齢者と若い障害者とは申請する窓口が別であったり、作業療法士や理学療法士がそれらとは別の課に在籍していることや、専門の建築士がいないことなどが問題である。このような住宅改造を請け負ってくれる上越市内の建築関係ボランティアのネットワークづくりが現在進行中である。平成9年度の上越市におけるリフォーム助成金の利用実態は、高齢者8件、身障者8件で計16件、補助額の総額は約560万円であった（上越市役所福祉課・高齢者福祉課調べ）。一方同じ県内の長岡市では、高齢者22件、身障者12件で計34件、補助額は約1,515万円である（長岡市介護福祉課調べ）。ちなみに「すこやか住まい助成制度」を実施している東京都江戸川区では、平成9年度の住宅改造助成件数は280件で、助成金額は8,732万円であった（江戸川区役所調べ）。江戸川区の実施しているこの制度は、所得制限や助成の上限を撤廃した先進的な取り組みとして注目され、地域看護の教科書にも取り上げられているほどである<sup>4)</sup>。

### 事例2

40代男性のBさん

状況：若くして脊損にて下半身麻痺。車椅子の生活。雪国なので克雪住宅の補助も考慮し、高床式の住宅を考えた。老後のことも考え、エレベータを備えた住宅を新築したい。金融公庫の融資を受けられるかどうか不安だ。

問題点：若いときは力もあるのでスロープを整備すれば済んだが、老後のことを考えるとエレベータの設置が望ましい。しかし高床式の住宅は、玄関以外に1階に上がるための階段やエレベータを設置すると、3階建家屋とみなされるため、より経費が膨らむことになる。ホームエレベータは安くなったとはいえ、200万円以上はかかる。上越市にはホームエレベータ設置に対する助成は特にない。高床式住宅は、耐震構造の不備や、非常時の避難路確保に問題がある。資金面についてみると、現行の制度では年金受給者は融資を受けられないことになる。

## 2. 住宅見学

### ①仙台市はぎのさとユニティ「展示場付きバリアフリー体験住宅」

仙台市郊外の85坪の敷地に、総額約7600万円をかけて建設された体験型のモデルハウスである。有

料ではあるが、見学者は多く、また病院でこの施設を紹介していることもあり、主に退院を控えた患者さんによる体験利用者が多数いる。仙台市内の福祉系・看護系の学校が、授業の一環でこの施設を利用している。住宅の新築・改造の相談や、福祉機器の展示・販売と使用方法等の相談にも応じている。体験利用にあたっては、施設設備が要介護型と自立型に大きく2つに分けられているので、それぞれのケースに応じて体験可能となっている。設備はすべて使用できるので、実際の生活感覚で試してみることができる。また細かいところでは、柱の面取りがしてあったり、窓・スイッチ・ふすまの取っ手などの高さが使いやすいように調整してあり、実際に障害を持つ人たちの意見や体験がうまく生かされている。障害を持った人たちが運営に関わっているため、木目細かな対応がなされている。

### ②「バリアフリーネット・ジャパン 21」

このネットワークのメンバーは会員制であり、建築関係者・福祉機器製造関係者・医療福祉関係者を有機的に結び付けることを目的としている。福祉機器を備えたショールームを東京港区に開設している。複数種類の浴槽、便器あるいは天井走行リフト、階段昇降機や段差解消機などが展示され、実際に触ったり操作してみることができる。福祉機器の開発・改善に関する情報が得られる。

### ③「長岡市高齢者等対応型モデル住宅」

長岡市高齢福祉課が主体となって建設し、1997年にオープンした。1階がモデル住宅、2階が介護用品の展示室となっている。住宅改造の相談員であるリフォームヘルパーの派遣制度があり、無料で各家庭に出向いて相談にのってくれる。リフォームヘルパーは、市の委託を受けた長岡市の建築協同組合のメンバーが担当している。

それぞれのモデルハウスが備えている機能は、一長一短であるが、いずれも著者たちが考えているような体験型を目指し、各種の相談窓口を備えているという共通点がある。今後ますますこのようなモデルハウスができてくるものと思われる。このような見学調査とは別に、全国にある高齢者あるいは障害者対応型のバリアフリーモデル住宅の所在地を調査してみた(図1)。すでに水戸ら<sup>3)</sup>によって報告されたように、通産省の指導の下に、先端在宅介護機器

システムを備えたウェルフェアテクノハウスは全国に13個所有り、その他、地方自治体あるいは民間による多くのモデルハウスが知られているが、まだまだ身近な存在とはなっていない。

## 3. 研究会とフォーラム

### ①研究会

1998年3月19日に、頸髄損傷の遁所直樹氏と、介護にあたっている父親の遁所彊二氏をお招きし、障害を持っている方の生の声を聞きながら、問題点をさぐる研究会が行われた。直樹氏は四肢麻痺のハンディを背負いながらも、行政書士と社会福祉士の資格を取得し、また米国や英国にまで研修に出かけるなど、精力的に活動し、現在は専門学校で障害者福祉論の非常勤講師をしている。このような活動の中から、頸髄損傷者の自立についての問題点を鋭く捉え、今の社会に常に疑問と課題を投げかけている。直樹氏は「物理的なバリアーはなんとか克服できても、心のバリアーは教育によってしか突き崩せない」として、統合教育の必要性を主張している<sup>5)</sup>。

また父親の彊二氏は退職後すぐに、息子の自立を可能とするための家づくりに取り組んだ。しかし、退職金が支給されたため、所得制限のある公的補助

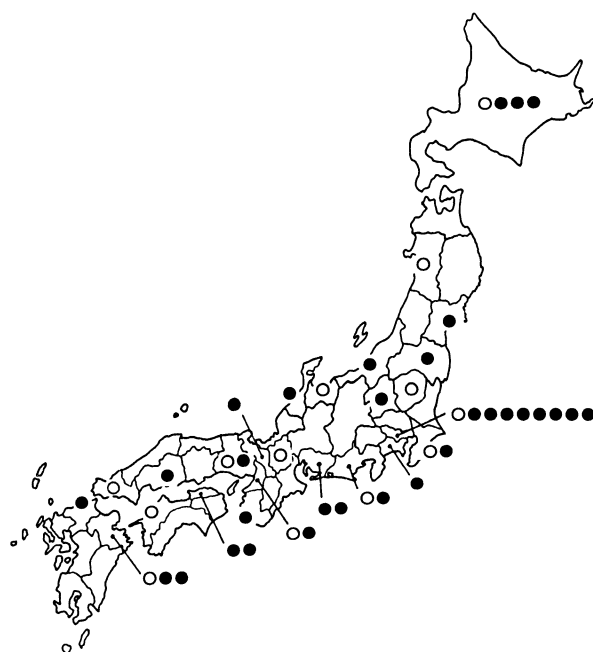


図1 高齢者・障害者等対応型バリアフリーモデル住宅マップ 白丸は通商産業省によるウェルフェアテクノハウスの所在地を示し、黒丸は野村歎(1995)の資料<sup>10)</sup>、および本会の調査による都道府県別モデル住宅の所在地を示す。

を受けられなくなり、また逆に、退職して所得がなくなってしまったため金融公庫の融資が得られず、資金面においてダブルパンチを浴びたようなものであったという。幸い周囲の援助を受けてその事は何とかクリアーしたものの、今度はバリアフリー住宅の具体的設計段階で、どのような設備を備えたら良いのか、どのような家が良いのか、という問題に突き当たってしまった。関係者に紹介されるがまま、様々な施設や個人住宅を見学し、独学で多くの工夫を凝らした家づくりを成し遂げた<sup>6)</sup>。この時、氏の頭の中に、「せめて家の間取をいろいろ試してみたり、福祉機器を使ってみたりして、障害を持った本人に一番適した家づくりを見つけることができる試行錯誤の場があったなら…」、という思いが膨らんだ。結局遁所氏のこの考えが、本研究会のベースになった。

## ②フォーラムの開催

第2回フォーラムは1997年5月8日に、「住宅環境と地域リハビリテーション」というテーマで、筑波大学の福屋靖子教授をお呼びして開催された。押し入れをトイレに改造するだけで、ある程度の自立が可能になる例や、地域との結びつきを大事にすることなどが示された。また上越市がかかえる雪国特有の高床式住宅の問題点については、討論会を開くなど、もっとみんなの問題として、声を大にしなければならぬ事が話された。

第3回フォーラムは1998年5月8日に「人生を最後まで歩みきるために」というテーマで、東北大学の外山義助教授をお招きして講演会を行なった。先生は「作り手」と「住み手」がバラバラの現代の住まいづくりを見直すことを提唱した。そして設計前の事前調査から、建設後の入居者の生活実態調査まで行い、「住み手」の立場に立った住まいづくりの実例を示された。

## 4. 住宅建築・改造の問題点

住宅の建築や改造は誰にとっても大変な事業であるが、その大変さは次のいくつかの点にあるのではないかと考えられた。

まず第1に、住宅改造そのものに対するためらいが挙げられる。高齢者が家族に遠慮してしまい、「年寄りのために…」とか「もう長くないから。」との理由で、本人も家族も改造を躊躇してしまう事が多い。第2に改造資金の問題であるが、そのような考

え方が基盤にあると、改造のための経費は余計な出費であるという気持ちが生じ、ますます住宅改造にブレーキをかけることになる。第3に、もし改造の意思決定がされたとして、「どのような改造が良いのか?」「バリアフリーの家づくりの相談は誰にすればいいのか?」という問題がある。在宅介護に関する専門家と、建築関係者が不足していることと、たとえ専門家がいてもスムーズに相談できるシステムづくりの立ち後れが指摘される。第4に、在宅介護に便利な各種の支援器具が多数開発されているが、それらの活用の立ち後れが挙げられる。支援器具の啓蒙活動とともに、本人に最も適した器具を選択できるように、試用できる展示場の設置などのシステム整備が必要と思われる。また住宅改造と補助器具類の活用は、両者が一体となって初めて生きてくるものであるから、助成制度も一本化すべきであると考えられる。

これらの問題点の多くは、行政の取り組みによって解決されるものであり、江戸川区の施策は特殊なものであるとして捉えるのではなく、「住民のために役に立つ人」が「役人」であり、「住民の役に立つ職員が集まっている所」が「役所」である<sup>7)</sup>、という江戸川区の発想を大いに参考にすべきである。

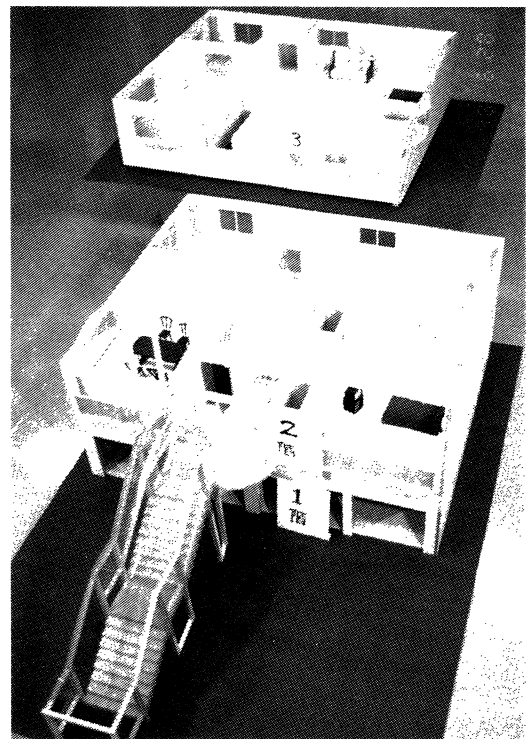


図2 大学祭で展示されたトライハウスの模型  
各階と玄関階段は取り外しができるようになっている。

## 5. トライハウスの提示

以上のような様々な問題を解決するための方策の一つとして、「トライハウス」の建設を提案したい。トライハウスについては杉田ら<sup>8)</sup>に詳しく述べられており、またその試作段階での模型作りも行われ、1997年の大学祭において公開された(図2)。

## おわりに

平成9年度における本研究会の活動目標の一つは、事例研究を通してできるだけ具体的な問題を拾い上げ、その解決方法を探ることであったが、十分に検討されたとはいえない。住宅改造に関わる専門職種の人たちと連携し、互いの情報の交換とともに問題解決の糸口を摸索することが重要と思われる。江戸川区の住宅改造の実態調査によると、改造のプロセスに関与した専門職種は少なく、多くの場合役所と施工業者が中心となって進められていることが明らかになったが、その少ない専門職種の中で保健婦が関与した割合は最も多く、全体の10.4%であったという<sup>9)</sup>。このように保健婦が在宅介護を支える重要メンバーの一員である事を考えると、保健婦養成課程である専攻科・地域看護学専攻、を抱える本学の果たすべき役割も自ずから明らかとなってくる。住民と行政と専門職の3者が、うまく連携することが最も重要なことと考えられる。そのような意味から、我々の考える「トライハウス」こそ、これらの3者が実際に交流し、共同作業をする場となるものと考えられる。

## 謝 辞

本研究会の活動の基になった、新潟市の遁所彊二氏と直樹氏に謝意を表します。また筑波大学の福屋靖子氏、東北大学の外山義氏には、貴重なお話を伺い、上越市役所の松永隆文氏、高橋峰子氏、廣田志保氏には、上越市における実態について教えていただいた。その他、本研究会の活動を支えて下さった多くの方に感謝申し上げます。

## 文 献

- 1) 新潟県福祉保健部福祉保険課：平成8年新潟県高齢者現況調査，1997。
- 2) 杉田 収，水戸美津子，関谷伸一ほか：快適住まい環境研究会報告 第1報 -自立応援をめざして-。新潟県立看護短期大学紀要，2，115～119，1997。
- 3) 水戸美津子，関谷伸一，西脇洋子ほか：快適住まい環境研究会報告 第2報 -バリアフリーモデルハウスと住宅改造事例の検討から-。新潟県立看護短期大学紀要，3，111～117，1997。
- 4) 久常節子，島内 節 編：地域看護学講座 9，障害者地域看護活動，医学書院，東京。pp171～180，1994。
- 5) 遁所直樹：英国見聞録。自費出版，1997。
- 6) 遁所彊二：期待せず諦めず，近代文藝社，東京，1995。
- 7) 野村みどり，大原一興：江戸川区の「すこやか住まい助成制度」のその後。高齢者のすまいづくりシステム研究委員会編，ハウスアダプテーション，住宅総合研究財団，東京，pp50～55，1995。
- 8) 杉田 収，関谷伸一，水戸美津子ほか：高齢社会に対応した住環境-トライハウスの基本構想の提案-。新潟県立看護短期大学紀要，4：27～34，1998。
- 9) 住生活サポートシステム研究会：高齢者が住宅生活を続けるための住生活サポートシステムに関する研究（その1）。住宅総合研究財団研究No.9213，1995。
- 10) 野村 歎：高齢者・障害者の住まいの改造とくふう。保健同人社，東京，1995。